平成 29 年度（2017 年度）自治体職員協力交流事業

協力交流研修員　研修報告書

2017 Local Government Officials Training Program in Japan

Trainee Reports

一般財団法人 自治体国際化協会

Council of Local Authorities for International Relations

は　じ　め　に

総務省及び一般財団法人自治体国際化協会では海外の自治体等の職員を受け入れることについて、財政面や受入実務面での支援を行うための「自治体職員協力交流事業」を展開しています。

平成８年度より創設された自治体職員協力交流事業も 22 年目を迎え、38 の国と地域から 1,141 名が本事業に研修員として参加されました。平成 29 年度（2017 年度）においては 9 カ国から 26 名の研修員が様々な分野で実り多い研修を行いました。

本事業は「ひとづくり」を通じた国際協力事業の１つでありますが、研修員の皆さんが日本の自治体の有するノウハウ・技術を習得され、帰国後、日本における研修の成果や経験をそれぞれの職場において大いに活かされ、また、自治体間の国際協力・交流の貴重な架け橋として活躍されていると伺っております。

そうした研修員の日本での奮闘ぶり、研修の成果を各方面の方々のご協力のもと、平成 29 年度も報告書として編集することができました。全事例でなく、国際交流や技術の習得に加えて、研修員本人のノウハウが自治体の行政施策の実施や問題の解決に貢献している事例等を中心に８事例を選定し、ダイジェスト版として掲載しております。

この報告書が研修員派遣国や今後研修員の受け入れを予定されている各自治体において活用していただけましたら幸いです。

最後に、研修員の受け入れにご尽力されました各受入自治体及び関係機関の皆様方に対して、心よりお礼を申し上げます。

一般財団法人自治体国際化協会
交流支援部　経済交流課

＝平成 29（2017）年度自治体職員協力交流事業スケジュール＝

2017 年

４月 21 日（金）　受入自治体担当者会議

東京研修

５月 21 日（日）　協力交流研修員の来日　　ルポール麹町泊
５月 22 日（月）　開会式
オリエンテーション
受入自治体との面談　　ルポール麹町泊
５月 23 日（火）　日本語レベルチェック
都内視察：江戸東京博物館等　　ルポール麹町泊
５月 24 日（水）　東京から滋賀（JIAM）へ移動

全国市町村国際文化研修所（JIAM）研修

５月 25 日（木）　開講式
日本語研修開始　授業：70 分×68 コマ（６月 21 日まで）
または 105 コマ（7 月　5 日まで）
５月 31 日（水）　日本伝統文化講義
６月　3 日（土）　神戸市内視察
６月 10 日（土）　日野町内視察
６月 14 日（水）　地方自治財政講義
６月 21 日（水）　成果発表会
６月 22 日（木）　4 週間研修閉講式
７月　5 日（水）　所外学習（唐崎中学校）
７月　6 日（木）　6 週間研修閉講式

専門研修

６月 23 日（金）または
７月 7 日（金）　受入自治体における専門研修開始

研修員の帰国

11 月下旬～５月にかけ順次帰国

都道府県	市町村	氏名	NAME	性別	国名	所属団体	受入分野
北海道	旭川市	康　麗之	KANG, RYEOJI	女	大韓民国	水原市	国際交流、一般行政
北海道	滝川市	バヤルフー　アリウンツェツェグ	BAYARKHUU, ARIUNTSETSEG	女	モンゴル国	ウブルハンガイ県	農業
北海道	滝川市	シャダブオチル　エンフジャルガル	SHADAV-OCHIR, ENKHJARGAL	女	モンゴル国	ウブルハンガイ県	農業
北海道	滝川市	ジャルガル　エンフトゥヤ	JARGAL, ENKHTUYA	女	モンゴル国	ウブルハンガイ県	農業
北海道	滝川市	ダグワサンブー　メンドアムガラン	DAGVASAMBUU, MEND-AMGALAN	男	モンゴル国	ウブルハンガイ県	農業
岩手県	－	李　悦	LI, YUE	女	中国	遼寧省大連市	経済交流
富山県	－	クラウゾ・デ・ルッカス・ルチェーチ　アネリザ	CLAUZO DE LUCCAS LUCHETTI, ANELIZA	女	ブラジル	サンパウロ州	教育
富山県	黒部市	雀　盛喆	CHOI, SUNGCHUL	男	大韓民国	江原道三陟市	一般行政
山梨県	－	ギマランエス・アモリン　アンドレ・ルイス	GUIMARAES AMORIM, ANDRE LUIZ	男	ブラジル	ミナスジェライス州	一般行政
岐阜県	高山市	翟　思	ZHAI, SI	女	中国	雲南省麗江市（麗江市人民病院）	小児科、地方行政
岐阜県	高山市	アロネス・シルヴァ　ジミー	ARONES SILVA, JIMMY	男	ペルー共和国	ウルバンバ郡	廃棄物処理行政等
愛知県	豊橋市	カンペザート・ブリト　アンドレッサ	CAMPEZATO BRITO, ANDRESSA	女	ブラジル	パラナ州パラナヴァイ市	教育
愛知県	豊橋市	アブエグ　ディンド	ABUEG, DINDO MARTINEZ	男	フィリピン	リサール州Pililla市役所	多文化共生
京都府	－	趙　心僮	ZHAO, XINTONG	女	中国	陝西省政府推薦（西安外国語大学）	行政
鳥取県	－	ムンロー　ジョディアン・シャウンアケー	MUNROE, JODYANN SHAWNAKAY	女	ジャマイカ	ウェストモアランド県	国際交流等
鳥取県	－	李　鑫	LI, XIN	女	中国	吉林省	商工行政、国際行政
山口県	－	張　靈慧	ZHANG, LINGHUI	女	中国	山東省	公立図書館
高知県	－	パリス　カルメラ・アントン	PARIS, CARMELA ANTON	女	フィリピン	ベンゲット州	造園技術、農業技術
高知県	高知市	アールディアスタントリーンエッキ・ヌーリスマ	ARLDYASTANTRIEN, EKKIE NOORISMA	女	インドネシア	スラバヤ市	一般行政
福岡県	北九州市	李　震	LI, ZHEN	女	中国	大連市	環境行政全般
福岡県	福岡市	ヘイ　マン　チャン　エイ	HAE MENN CHAN AYE	女	ミャンマー	ヤンゴン市開発委員会	上水道
福岡県	福岡市	メイ　ゼン　ウー	MAY ZIN OO	女	ミャンマー	ヤンゴン市開発委員会	上水道
福岡県	福岡市	イェー　ティーハー　アウン	YE THIHA AUNG	男	ミャンマー	ヤンゴン市開発委員会	環境
佐賀県	佐賀市	石　暁琳	SHI, XIAOLIN	女	中国	連雲港市	一般行政
長崎県	長崎市	鄭　暁昆	ZHENG, XIAOKUN	女	中国	福州市	人事、社会保障、経済、平和、観光、国際等
大分県	－	戴　立君	DAI, LIJUN	女	中国	湖北省	観光行政、国際交流

平成 29 年度（2017 年度）自治体職員協力交流事業（LGOTP）
報告書（ダイジェスト版）

目　　次

１．研修を終えて

·····アネリザ クラウゾ デ ルッカス ルチェーチ（ブラジル サンパウロ州） 1

平成 29 年度自治体職員協力交流事業を実施して·····（富山県） 4

２．黒部市で 6 カ月·····雀　盛喆（韓国 三陟市） 6

国際友好都市大韓民国三陟市との職員交流を通して·····（富山県黒部市） 9

３．Public Health Policies in Yamanashi Prefecture

·····André Luiz Guimarães Amorim（ブラジル ミナスジェライス州） 12

山梨県・ミナスジェライス州との架け橋創り·····（山梨県） 15

４．新たな知見と文化理解の促進について·ディンド アブエグ（フィリピンピリリア市） 19

外国人市民向け行政サービスの充実に向けて·····（愛知豊橋市） 22

５．美しい鳥取·····李 鑫（中国琿春市） 24

平成 29 年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修·····（鳥取県） 29

６．Final Report for Local Government Officials Training Program 2017

·····HAE MENN CHAN AYE,　MAY ZIN OO,　Ye Thiha Aung（ミャンマー ヤンゴン市） 31

平成 29 年度自治体職員協力交流事業 報告書·····（福岡県福岡市） 37

７．日本研修生活の回顧·····石 暁琳（中国 雲港市） 39

平成２９年度自治体職員協力交流事業について·····（佐賀県佐賀市） 42

８．大分県での研修をふりかえって·····戴 立 君（中国 湖北省） 44

湖北省研修員の受入について·····（大分県） 47

研修を終えて

氏　　名　アネリザ　クラウゾ　デ　ルッカス　ルチェーチ
出　身　国　ブラジル連邦
受入自治体　富山県
研　修　先　高岡市立野村小学校

1. 来日前に期待していたこと

私はブラジルのサンパウロ州の教育委員会と富山県による面接に合格して来日しました。このプログラムはとても興味深い内容だと思いました。ブラジルの教師は、日本で学んでいるブラジル人の子どもたちをサポートするだけでなく、日本の文化と教育方法を学ぶことができます。ブラジルに帰国後は、ブラジルの教育の発展と、ブラジルと日本の友好に尽くすことができます。

私は UNESP 大学で日本語を勉強しました。その後、サンパウロ日本人学校において、日本人の学生にポルトガル語を教えていました。現在はサンパウロ州立中学校と高等学校で働いています。私にとっては、日本に来ている日系ブラジル人の学生にポルトガル語でサポートするだけではなく、自分自身の日本語の能力を高めることができます。日本語能力の向上はこの機会における私の目標の一つでした。今回の来日は二回目です。一回目は留学生として、九州の高等学校で１年間勉強しました。そのときに日本の文化、日本語そして習慣を学びました。今回は、さらに日本の教育システムを学び、ブラジルの教育の参考にしたいという期待を持って来日しました。

２　研修について

JIAM での研修後、専門研修は六月の最後の週から始まりました。このプログラムでは、ブラジル人の児童に国語と算数の学習支援を行います。それと同時にブラジルと日本との友好を深める活動に参加したり、いろんな経験を通して日本の教育について学んだりします。

研修では、はじめ小学校１年生の児童を支援しました。その授業は「文字」と「数」の勉強でした。その他に「読む」、「書く」ことの練習をしました。他学年は教室からプリントをもってきて勉強をしました。児童にとって大変なことはドリルの内容を理解することでした。日本語で書いてありますから、児童は正確に内容を読みとることができません。そんな時に、ポルトガル語での説明で学習の補助をしました。

日本の算数とブラジルの算数はとても違います。ですから家で家族は教えることができません。そのため、児童にとってブラジル人の先生からポルトガル語で説明を受けて理解する機会が、とても重要です。学校でしか勉強することができないのです。日本の計算のやり方をブラジル人の児童が覚えるにはとても時間がかかります。

国語の学習で一番困ることは漢字です。ブラジル人にとって暗記する学習は多くありませんので、慣れていません。ブラジル人の子どもたちが授業のスピードについていくことはとても難しいのです。ブラジル人教師のサポートがな

くては次第についていけなくなることが明らかです。ルビのふってある教科書や漢字ドリルの継続などが必要だと思いました。

それ以外に私が研修を通して興味深く思ったことは、児童が一日、中学校にいることです。ブラジルでは考えられません。ブラジルでは家庭での生活がもっと長いのです。そして家庭で過ごす時間が大切にされています。それから学ぶ教科もブラジルとは大きく異なります。この文化の違いを親が理解することはとても難しいと思いました。

勉強のサポートをする研修員

夏休み中も、私はいわせの教室で算数と国語の学習を支援しました。児童にとっても教師にとっても、休み中に勉強することはとても大変ですが、そのサポートのお陰で学校の授業に遅れずに、理解できるようになるのです。休みがないことは問題ですが、補習も必要です。

家庭訪問も行いました。ブラジル人の保護者と会って、いろいろと相談に乗りました。どんな学校生活を送っているかとか、勉強の様子、学校についてお話ししました。家族は長時間働いていますので、あまり子どもとの勉強時間がありませんでした。このままの状態では、子どもたちが学習についていけなくなったり、親との日本語理解の差が広がったりすることが心配です。

また、私はアレッセにおいても研修と見学をしました。そこでは毎週火曜日と土曜日に、ブラジル人の中学生と高校生に対して、先生たちがボランティアで国語、社会、理科、科学、英語そして数学を教えてくれます。そこでは生徒たちはあまりポルトガル語を話しません。ポルトガル語は家だけで話すようです。日本語が上手に話せるようになるように、また理解することができるようにと、難解な科目を学んでいました。ブラジル人の子どもたちが一生懸命学んでいる姿、がんばっている姿を見ました。

その一方で、学校の先生からは「ブラジル人の子どもは勉強がきらいだ」という声も多く聞きました。それはとても悲しいことでした。子どもたちは勉強することが嫌いなのではないと思います。困難を抱えているから、うまくいっていないのだと思います。

研修を通して、ブラジル人家庭での保護者と子どもとの問題、学校での日本人生徒とブラジル人生徒との問題、先生方とブラジル人家族との問題など、たくさんの問題があることを知りました。一人の力では解決できないことですが、一人でも多くのサポートが彼らに必要です。自分がその役割を果たせるように、短い期間ですが精一杯頑張ってきました。

3　帰国後、母国での研修の生かし方

ブラジル人の児童のほとんどが、日本生まれです。幼稚園から日本の習慣や文化を学びます。保護者にとっては日本の学校はとてもよいと感じています。ここでは安全な生活ができますし、信頼できます。そしてきまりを遵守します。児童は規則を守ります。学校はきまりを守ることを大事にし、児童もきま

りを守ります。だから大人になったらあまり厳しくしなくても、ルールを守ることができるようになります。この点は、ブラジルの教育にとても役立つし、必要であると思いました。

また、日本の学校はとても組織化されています。先生たちが１年間にすることや学校の計画が全部分かります。ブラジルでは学校ごとの独自性が尊重されている反面、それぞれの学校がどのような計画や方針で運営されているのかが分かりにくいです。教師が学校をかけもちして教えていることもあります。そのため、学校で教師がまとまりにくい面があるのです。

また、児童の関心や自主性が重んじられていることも参考になりました。帰国後の指導に生かしていこうと思います。

保護者が学校に協力的であることも帰国後に報告したいことの一つです。保護者は、学校から出される様々な「おたより」によって、学校の生活や予定について把握しています。PTA 活動があるときは、ほとんどの保護者が参加します。学校と保護者が協力している点が素晴らしいと思いました。予定を把握しているということについては、子どもたちも「おたよりちょう」や「生活ノート」を活用していて、忘れ物をしません。このやり方は参考になります。

私はこのような日本の教育の良い面を帰国後に報告し、学校に対して提案していきたいと考えています。しかし、ブラジルの教育の良い面である、個性を大切にして学習していることや、人に親切であること、差別をしないことなどは、日本の先生方にも伝える必要があると思っています。互いに学び合うべきだと考えます。

４　研修を終えて、富山のみなさんに伝えたいこと

私が初めて富山県高岡市に来たとき、皆さんは私をとても歓迎してくれました。本当にありがとうございます。

私にとってこの富山で研修するチャンスをいただいた事はとても嬉しく忘れられない出来事です。私は野村小学校での研修で、職員の皆さんに日本の学校教育などについて親切に教えてもらい感謝しています。

その中で感じたことは、日本人とブラジル人の習慣、文化、教育などの違いについてです。ブラジル人の子供たちは、遅い、やる気がないと思われている場合が多くありますが、やる気がないのではなくて分からないだけなのです。そんな時には少しだけ考える時間を彼らに与えたら、きっと出来る事も増えてくると思います。また私たちのような研修員が少しでもサポート出来て、子供たちのやる気につながったら嬉しいと思いました。

浴衣を着た研修員

私は日本で学んだ事をブラジルに帰って皆に伝えたいと思います。
皆さん本当にありがとうございました。

平成29年度自治体職員協力交流事業を実施して

自　治　体　名：富山県
研　修　員　名：アネリザ　クラウゾ　デ　ルッカス　ルチェーチ
派 遣 元 自 治 体：ブラジル サンパウロ州
研　修　分　野：教育
研　修　期　間：６か月
主 な 研 修 先：高岡市立野村小学校

１ 背景・目的

本県では、県の総合計画「新・元気とやま創造計画」に「グローバル社会における地域づくり・人づくり」を掲げ、海外からの技術研修員を積極的に受け入れている。これまで、南米諸国、友好提携先等、その他開発途上国に対する技術協力事業の一環として技術研修員を受け入れ、さまざまな分野の技術移転により母国の経済開発に貢献しうる人材を養成するとともに、研修員と県民とのふれあいを通じて国際親善に寄与してきた。

一方で、近年の県内外国人住民の増加や定住化に伴い、日系ブラジル人をはじめとする多くの外国籍児童が、日本の小学校で言葉や文化の違いに戸惑い、悩みを抱えているという現状があり、多文化共生に配慮した教育環境の整備も課題となっているところである。

このため富山県では、平成 21 年度より、ブラジルサンパウロ州から教育経験のある人材を受け入れ、ブラジル人児童が多い小学校で、ポルトガル語やブラジル文化に配慮した学習支援を実施するとともに、外国籍児童の保護者に対して日本の教育制度等の理解促進に努めることを目的とした「多文化共生推進研修員受入事業」を実施している。

２ 研修内容

日本の教育制度の理解、外国籍児童への学習支援、家庭訪問への同行

３ 事業実施にあたって工夫、苦労したこと

予定していた候補者の辞退があったことから、急遽アネリザ研修員の来日が決まった。そのため、在留資格認定証明書等の発行が遅れ、本事業の全体研修開始までに来日できるか危うい状況であった。CLAIR 担当者及びアネリザ研修員、旅行代理店、入国管理局、大使館等と密に連絡をとりながら、最終的に全体研修に間に合わせることができた。

小学校の夏休み期間中は、児童が学校にいないため、研修内容の設定に苦労した。小学校教諭向けの研修及び ALT 向けの研修を見学させてもらい、また、高岡市役所の外国人相談窓口等での研修を設定した。

４ 成果・課題

アネリザ研修員はとてもまじめな性格で研修に対する意欲も十分であった。また、過去に１年間の滞日歴があり、日本の文化にある程度慣れていたため、本県での生活や専門研修に対して不安は少なかった。実際に本県での研修が始まると、熱心に研修に取組み、研修先の野村小学校と外国籍の保護者との橋渡し役をつとめるなどし、本県の多文化共生施

策の推進に大きく貢献した。
　帰国時には、研修で得た日本の教育制度に関する知識をブラジルの先生達に紹介したいと言っており、アネリザ研修員には日本の教育制度の良い部分をブラジルに広めるキーパーソンとなっていただければ幸いである。
　本県独自で受け入れている他の５名の研修員との関係もとても良好で、定例のミーティング及び花火大会、茶道体験等の各種イベントを通して親睦を深めていたようである。
　また、地域の行事にも積極的に参加し、県民との交流を通じて友好親善にも大いに貢献した。研修員には、帰国時に「とやま名誉友好大使」を委嘱したところであり、帰国後は、本県で習得した技術を活かして活躍するとともに、本県と各省州との友好交流の架け橋としての役割を果たしてもらえるよう願っている。
　ブラジルサンパウロ州は、富山県にとって人的交流にとどまらず、経済、観光、環境等の各分野における本県の重要なカウンターパートであり、今後ますます関係は強いものになると感じている。過去に協力交流研修員として来県した方で、帰国後、各分野で本県との交流の中心人物として活躍されている方は多く、アネリザ研修員も、今後、本県との橋渡し役として活躍してくれるものと期待している。

立山にて

協力交流研修員研修報告書

「　黒部市で６カ月　」

氏　　名 (Name)	崔盛喆（チェソンチョル）
出　身　国 (Country)	大韓民国
受入自治体 (Host Institution)	富山県黒部市
研　修　先 (Training Facility)	黒部市役所企画政策課

１　本事業に応募した動機

普段日本に関心がたくさんありましたが、三陟市が 14 年前に黒部市との派遣勤務をしたという話を聞いてから、私も機会があれば行きたいと思っていていました。

三陟市では福祉担当公務員として働いています。それで、福祉関係業務に関心が特にあります。でも、黒部市では福祉業務だけでなく全般的な行政と日本の文化など多様なことを習いたくて応募しました。

２　研修の概要

黒部市の全般的な行政事業について研修を受けました。

行政事業の研修は市役所の各課で研修をして多くの施設を見学して、三陟市とどんな違いがあるかすこし分かりました。例えば研修で見学した、宮野用水発電所では、発生した利益は農業の発展のために使用されるそうです。水力発電はエコエネルギーであり、三陟市にも高い山と川があって水力発電所の建設が可能かも知れないと思いました。

市内施設見学：宮野用水発電所

重点研修で福祉関連部署から研修を受けたとき、福祉課で生活保護について研修を受けました。一人に支給できる生活費と医療費など少しは違いがありましたが、韓国の制度と似ている部分がたくさんありました。

でも、三陟市の場合は人口約 7 万人程度で生活保護が 3,200 人以上ですが、黒部市場合は人口約4万人程度で生活保護が 85 人しかいなくて、制度の基準に違いがあったとしてもとても大きい差で驚きました。

また、カリエールというリハビリ施設を見学しました。その施設には体の不自由な高齢者が短期間リハビリを受けながら生活しています。「何でも自分がしよう」と努力して以前より健康になったお年寄りが多いそうです。
韓国もますます高齢化が社会的な話題になっている中、より便利で、有益な施設がたくさん必要だと思いました。

国内研修では、10 月 25 日（水）～27 日（金）にかけて、岩手県、福島県、東京都に、11 月 13 日（月）～15 日（水）にかけて、広島県と京都府に行きました。

国内研修を通じて、福島原発事故現場と広島原爆ドームに訪問できたのは、意味ある時間になりました。

韓国は最近、原発を減らす努力をしています。三陟市も新しい原発が建設される敷地に指定されていますが、キャンセルを要請するなど、多くが脱原発に向けて努力していて、そのため少しは関心がある分野でした。

まず福島県では双葉町に行きました。双葉町に入る前に放射線量を測定する機械を体に装着しました。

福島県双葉町視察

見学した町の姿は想像とは少し違いました。私は 2011.03.11.の事故後、町の多くが整備されて、正常に戻ったと思いましたが、現場の姿はそうではなかったです。町の姿、建物は以前のそのままでしたが、人が住めない町、これが原発の現実かもしれません。事故当時、早い対応によって、被害が減ったのかもしれませんが、原発は大きな危険を持っているようです。

また広島県では原爆ドームに行きました。原爆ドームは1945年8月6日に広島へ原子爆弾が落ちたあとに唯一残された建物です。本とインターネットでしか見たことがないものを直接見ることができて驚きました。広島平和記念資料館では被爆当時の惨状を見せてくれる資料が展示されています。原子爆弾によって破壊された当時の姿をありありと見ることができました。原爆前後の町の写真もありました。

原爆ドーム視察

歴史に再びこのようなことがあってはだめだと思いました。このような意味から再び原子爆弾が落とされることのないような平和な世界にするために公園を作ったそうです。

また、原爆被害者の遺品と多様な被爆資料がありました。原子爆弾は思ったよりはるかに凄くて危険なものだとわかりました。韓国も原子力発電所についてよく考えるべきだと思います。

3　帰国後の展望

今回の研修期間は私の人生で貴重な時間になりました。特に黒部市の行政研修だけでなく、国内研修を通じ、福島原発事故現場と広島原爆ドームに訪問できたのは、意味ある時間になりました。重点研修で習った福祉事業を韓国で提案する計画です。市民たちのための多様な福祉事業がありましたが、妥当性を検討してすこしは実行可能だと思います。

今回の研修を今後の私の人生に活用したいです。

「　国際友好都市大韓民国三陟市との職員交流を通して　」

自 治 体 名　　富山県黒部市
研 修 員 名　　崔 盛 喆
出　身　国　　大韓民国
研 修 分 野　　行政全般
研 修 期 間　　６か月（来日時点からの月数）
配　属　先　　企画政策課

１　背景・目的

今回黒部市は国際友好都市である大韓民国三陟市との間で職員相互派遣事業に関する協定に基づく両市の職員相互派遣事業を実施するにあたり、よりよい事業とするため、LGOTP を活用して研修員の受入事業を行いました。

本協定は両市の職員を派遣することで、両市間の相互理解と信頼を醸成することを目的としたものであり、一時中断していたものの今回 14 年ぶりに再開の運びとなり、４回目の実施に到りました。

これまでも継続して両市においてスポーツによる市民交流事業や行政関係者による訪問事業などを行ってきましたが、いずれの事業とも本事業は性質が異なります。今回の相互派遣事業では両市の職員との交流を通して両市を改めて知る機会となり、今後さらに両市の交流が活発になることを目的として実施しました。

２　研修の概要

本市での研修は、６月 23 日から 11 月 28 日にかけて、市役所での研修並びに施設の見学を中心として実施しました。また黒部市以外の日本についても知り学んでもらうため、県内研修を３回、国内研修を２回実施しました。

くろべ牧場まきばの風視察

＜市役所各課研修＞

行政研修として市役所の各課で研修を行いました。研修では各課を順番に１日単位で回り、各課の担当業務の説明を受けるとともに、所管する施設見学なども含めた研修を行いました。また崔盛喆さんの専門分野でもある社会福祉分野にかかわる担当課については重点研修と位置づけ、２日間にわたり研修を行いました。

＜県内研修＞

県内研修では、富山県の自然と風土について学ぶため、世界遺産の五箇山合掌造り集落や、立山アルペンルートを視察しました。また今回関西電力が発電施設の保守、工事用として使用している「黒部ルート」の見学会にも参加し、黒部の自然や黒部川と発電所群の関係など、黒部市における自然の活用について学ばれました。

＜国内研修＞

三陟市では現在原子力発電所の建設予定があり、三陟市では意見が分かれていると崔盛喆さんから伺ったことをきっかけに、原子力に関わる箇所を視察することとしました。国内研修は２度設定し、１度目は、岩手県、福島県、東京都を巡りました。福島県では福島県双葉町のご協力により、福島原子力発電所事故以降も、事故以前の状況に戻っていない双葉町の現状を視察しました。

また２度目の研修では広島県､京都府を巡り、広島県では宮島、京都府では寺社仏閣などを巡りながら日本の文化などについて学ぶ一方、広島では原爆ドームや平和記念公園などで原子爆弾とその被害について視察し、双葉町の視察とはまた違う、原子力の側面について触れられました。

国内研修：双葉町視察

国内研修：原爆ドーム視察

３　研修実施にあたって工夫、苦労したこと

職員相互派遣事業が 14 年ぶりの実施となったため、研修員の受入全般に対する準備に苦労しました。特に研修内容については、できるだけ多くのことを知ってもらいたいと思い、市役所全課に依頼して研修を実施できるよう調整をしました。また崔盛喆さんの希望を踏まえつつ県内、国内研修を調整するよう努めました。

４　成果・課題

本事業を通して国際友好都市である三陟市の行政や現状について改めて知ることができました。また崔盛喆さんの研修を通して、黒部市と三陟市の違い、また日本と韓国の違いについて学ぶことができました。

また今回 LGOTP を活用し相互派遣事業を行ったことにより、来日から帰国までの手続きについて、滞りなく対応でき、安心感がありました。また各自治体に派遣前に日本語研修が組み込まれていることは研修員にとっても、受入側としてもよかったと思います。職員との交流については、来市職員が自分の日本語能力に自信がなかなか持てなかったようで、積極的な交流は難

しいところもありました。今後も日本語能力については、コミュニケーションをはかるうえで大きく影響すると考えられるので、自治体に派遣された後も日本語についてフォローできるような体制を考慮し、より両市の交流が促進されるように努めたいと思います。

Public Health Policies in Yamanashi Prefecture

氏　　名	André Luiz Guimarães Amorim
出 身 国	Federative Republic of Brazil
受入自治体	Yamanashi Prefecture
研 修 先	Global Tourism and Exchange Division, Yamanashi Prefecture

１　本事業に応募した動機

(Reasons for applying for this program)

I have entered a public management career in the Minas Gerais State government because I wanted to contribute for the improvement of my fellow countrymen´s lives by working on consistent public policies. Hence, I have been working as an officer at the Public Health Office for the past 10 years, where I had the opportunity to understand some difficulties in our Public Health System (SUS).

I became curious about notable characteristics about Japanese Health System, like:

i) high number of hospital beds per habitants (even that, health spending is not so high compared with other developed countries which also have universal health coverage);

ii) payment system based on case-mix with a peer review committee, in each prefecture, which can deny payments for health services judged to be inappropriate.

iii) In addition, Japanese have great use of outpatient services compared with inpatient care, number of physicians per bed are low, and there´s a patient´s cultural preference for less invasive care, which results low use of surgical procedures.

Those features seemed to be the best possible conditions for a universal coverage health system, and understand the environment in which they took place and work nowadays could bring useful knowledge for me.

２　研修の概要

(Summary of Training)

（何を学び何を身に付けたかを含む。）

(What did you learn?)

Annual mandatory exams for employees and public officers: people are obligated to do a sort of exams every year, supported by their own companies. That´s an interesting way to quit access difficulties and increase prevention exams coverage.

A recent reform in NHI, in order to promote fiscal management, will transfer oversight from municipal to prefectural level next year: this strategy could be useful to help Brazilian states to improve fiscal control and cities to deal with fiscal imbalance.

Interviewing public health sector at Yamanashi Prefectural Government

Internet sites full of information about clinics and near health services to citizens houses, with schedules and foreign language is available in Yamanashi. Monthly newsletters are sent to citizens houses to inform about exams and lectures about health, including in a small city of 20 thousand people (Uenohara). Information about health promotion and strategies related could be restricted in my state and could be improved to be easier or friendly for citizens.

Visiting Yamanashi Chuo Hospital: Ms. Yuhara, me and Mr. Maeda

At least, I had the opportunity to know some health strategies, like hospital inspections. Mostly of hospital wrong practices, when notified by the government, are solved in time, no need to penalize them. According to that example and my regarding the daily life experience, the most impressive feature of Japanese culture is the sense of self-responsibility. Obviously it makes easier for the public managers duties when running out the policies.

I also must mention the easily access to many facilities which maintain a high quality of life, even on a medium-size city like Kofu, for instance: stores, parks, clubs, cultural events, clinics, hospitals. These conditions of life are a very important component for health level, as described in Alma Ata Declaration in 1878, by World Health Organization (referring to health as a holistic concept, resulted by living conditions and many different policies).

３　帰国後の展望

(Plans upon returning to your home country)

（本事業で得た成果を帰国後どのように活かしたいか）

(How would you apply what you have learnt on the program?)

As a public manager, I could bring home some experiences from Japanese Health System to apply them in technical studies, presentations and discussions for decision-making in many areas of the SUS. Despite the two systems are quite different – for example, planning and managing hospitals policies in Brazil have some constrainments like shortage of budget, beds, physicians, whereas Japan have some of the best averages of these measures –, I believe that some features of the Japanese Health System could be applied in Minas Gerais State to improve our healthcare system, like: establishment of a minimum economic scale to delegating managing tasks to cities, including centralization of system financial management and inspections of hospitals, clinics and other establishments related to public health; actions to improve the level of public access to useful information for citizens (i.e. hospital and other facilities, exams, etc). As a tutor, at MBA courses, which discus models and ways to implement new strategies on public health policies, I could encourage students to conduct good healthcare system analysis of the Japanese healthcare system, compare it to our own system and perhaps stimulate ideas to introduce innovations.

『山梨県・ミナスジェライス州との架け橋創り』

自 治 体 名　山梨県
研 修 員 名　Andre Luiz Guimaranes Amorim
（アンドレ ルイス ギマランエス アモリン）
出　身　国　ブラジル連邦共和国
研 修 分 野　一般行政
研 修 期 間　８か月（来日時点からの月数）
主な研修先　山梨県観光部国際観光交流課

１　背景・目的

山梨県（以下、本県）では、海外の自治体等の職員を本県に受入れ、本県の持つノウハウ、技術等を習得させ､各出身国の発展に寄与するとともに、本県滞在中に県内の国際交流事業等に積極的に参加させることで、地域の国際化や多文化共生を推進することを目的として、平成８（１９９６）年度から自治体職員協力交流事業を活用している。

従来は、主にアジア圏からの自治体職員を受け入れていたが、県姉妹州であるブラジル連邦共和国ミナスジェライス州（以下、州）との交流強化という観点から、平成２５（２０１３）年度以降は同州政府職員を受け入れている。

平成２９（２０１７）年度は、同州政府公衆衛生局の職員であるアンドレ・ルイス・ギマランエス・アモリン氏（以下、研修員）を研修員として受け入れ、主に山梨県の医療施策・医療制度に関する研修を行った。

２　研修の概要

研修員は、現在、州政府公衆衛生局のパブリックマネージャーとして、病院政策の企画管理を担当している。当該局では、個々の病院の特徴（プロフィール、設備、目標人数、専門家数、予算等）に基づき、財政支援者の見直しを行い、また、医療サービスへのアクセスに対する規則や方法及び臨床基準の見直しを通して、医療サービス契約の管理に対するコントロールを改善し、提供システムについても見直しを進めているところである。

上記の背景を踏まえ、研修生の本県での研修希望内容は次の３つである。

１　本県の医療施策の概要
２　診療報酬の制度及び医療機関へのアクセスの現状と課題
３　患者の平均入院日数及び通院回数減少、医療費削減等の取り組み

はじめに、本県の医療施策を管轄する所属において、医療施策に係る計画に沿って説明を受け、その後、関連所属、病院、福祉プラザ、また、市町村へ行き、研修を行った。

また、研修だけでなく国際観光交流課における業務、州との連絡・調整、自主企画講座（ブラジル国際交流員と協力し、母国に係る紹介するもの）などを行った。

（１）山梨県福祉保健部医務課での研修

まず、福祉保健部医務課から医療制度における国と地方自治体の役割、医療制度改革の内容を理解するため、「山梨県地域保健医療計画」の内容に沿って、本県の医療施策の概要、県の役割、医療の法律について説明を受けた。併せて、日本の医療に係る制度（高額療養費制度、無料低額診療事業など）についても知ることができた。また、同課別担当では、県内の病院に係る概要、本県が行う病院の審査方法などをインタビューした。

写真１：医務課でのインタビュー

（２）山梨県立中央病院における研修

研修員は日本の病院へ行ったことがなかったため、山梨県立中央病院へ行き、医事課担当者から病院の施設案内、病院概要、診察システムの導入・活用状況について説明を受けた。研修員からは、デジタル医療記録・電子カルテについて聞き、本県にある多くの病院が私立で、電子カルテを利用している病院はあるが、各病院が同じシステムを利用しているわけではないということがわかった。また、当病院では紹介状なしで診断を受けるために、選定療養費として 5.000 円がかかるため、かかりつけ医による診断が当病院で勧められている。そのため、地域と専門に分かれている診療所と病院の名簿が院内に掲示されている。また、連携している医師に診てもらった際に、重病が発見されたら、再度、当病院に紹介状を出すことになる。こういったシステムは州にはないと、新たな気付きがあった。

写真２：山梨県立中央病院入口にて

（３）上野原市長寿健康課における研修

健康な高齢者が多いと、上野原市に研修生が目をつけ、市町村における健康推進事業についてインタンビューした。

州には、８５３の市町村があるため、研修員も市町村の取り組みについて関心を持っていたことから、事業について熱心に理解を深めた。

その中で、特に印象的であったと語ったことは、事業の広告や診断の通知文であった。日本の自治体では、当たり前に感じる市町村発刊の広報誌であるが、医療に係る情報を「誰でも・均等に」知ることができることはすごいとのことであった。

写真３：上野原市でのインタビュー

３　研修実施にあたって工夫、苦労したこと

本県到着時、高い日本語能力は有してはいなかったが、学習意欲が非常に高く、日本語能力試験の受験を提案したところ、数か月で簡単な日常会話、メール作成を行うことができるまでとなった。

研修は主にブラジル人国際交流員によるポルトガル語・日本語通訳を介することとなったたが、事前打合せを重ねた結果、特段問題なく、研修を終えることができた。反面、通訳同行が条件であることから、当方側での日程調整が難しかったということは少し苦労した点として挙げられる。

また、本研修は、ただ研修員の専門知識を高めるだけでなく、両県州の交流促進の担い手となる人材の育成という観点から実施している事業であることから、専門分野に関する研修以外に、観光部で運営しているブログ等をとおした県内観光資源の外国語による情報発信に携わってもらったり、県職員向けの自主企画「ランチ講座」の開催にも尽力してもらった。研修員本人にとっても本県をより深く知る機会となり、好評であった。

４　成果・課題

平成２５（２０１３）年度以来、ミナスジェライス州政府からの職員受け入れを継続しているが、州政府内に本県滞在経験者を増やすことにより、同州との姉妹交流の継続的な発展に貢献している部分は成果として挙げられる。

また、外国語により研修員と直接コミュニケーションができる職員も少なくなかったが、前述のとおり、数か月で簡単な日常会話、メール作成を行うことができるまでとなり、日本語能力の向上も一つの成果として挙げられる。

現状、ミナスジェライス州政府内で一定のレベルの日本語能力を有する職員

はほとんどおらず、コミュニケーションの問題は一朝一夕で解決することの難しい課題となっている。しかし、研修員から日本語を広めていければ、多少の言語習得へのストレスは軽減されるものと見込んでいる。

また、専門分野での知識習得という点では、研修員にとって学ぶところは多いものの、研修員の知識や経験を本県に還元する機会がないことも、従来の課題である。

しかし、この点においても研修員には現地での還元方法を常に検討していくよう促してきた。研修生は現地の学校で専門分野に係る講義を行っているとのことであり、本研修について伝えていくと意欲的であった。

研修員を姉妹州から迎え、国際交流イベント等へ参加してもらうことにより、県民の国際交流意識の醸成には一定の効果を挙げており、本事業活用の意義は少なくない。

今後も、諸課題への解決策を探りながら、本事業活用のメリットを最大限引き出すため、同州及び本県のニーズの摺り合わせをしながら研修員の選定を行い、より相互に利益のある交流に繋げていきたい。

「　新たな知見と文化理解の促進について」

氏　　名	ディンド　アブエグ
出　身　国	フィリピン共和国
受入自治体	愛知県豊橋市
研　修　先	豊橋市役所多文化共生・国際課

1　本事業に応募した動機

自治体職員協力交流事業の案内を受けた時、私は本事業に応募することをすぐに決意しました。機会と時間があれば、日本を再び訪問することは私にとって最優先事項であったため、この事業に参加できることを願っていました。そして、その願いが叶いました。

応募した動機は、まずこの研修の中で学べる内容量と研修方法に魅力を感じました。自治体職員協力交流事業の目的を知ってから、更に応募に対する思いが強まり、市長にもこの事業への参加の許可を求めました。市長は積極的に参加を進めるだけでなく、必要書類の準備までも手伝ってくださいました。なぜなら、市長も私も自治体職員協力交流事業から得られる知識や経験を、研修後私たちの自治体で応用することができると考えたからです。

私の仕事では、地域のコミュニティーと直接掛け合うことが多いので、海外協力交流研修事業で多文化共生についてより深く知りたいと思いました。私にとってこの事業は、様々な文化的な背景を持つ人たちが共に暮らすための新しい方策やアプローチを学べる場となると考えました。

2　研修の概要

豊橋市役所多文化共生・国際課では、研修期間に以下の業務を行いました：

a. 当課フェイスブックページの広告を作り、フィリピン人市民が集まる場で配布
b. タガログ語ニュースレターの作成・配布
c. 通訳業務のサポート、翻訳業務
d. 日本語教室の立ち合い
e. 小中学校での学習体験・見学
f. フィリピン人市民対象のアンケートやインタビューを通した調査

このような仕事を午前 9 時から午後 5 時まで行ったほか、さらに以下のような活動を行う機会をいただきました：

a. 豊橋フィリピノアソシエーション（TFA）の打ち合わせやイベントに参加
b. 公営住宅に住むフィリピン人市民からの相談対応
c. 豊橋ブラジル協会（ABT）のイベントや事業のサポート
d. 豊橋市の歴史的な建造物や公園などを見学し、文化や歴史について勉強
e. 豊橋市の祭りや文化体験などに参加
f. 教会に通い、地域住民と交流
g. フィリピン人市民のためのラジオ番組「TFA Pinoy Talk sa Radio Nikkey」でラジオパーソナリティーとして、毎週午後 7 時半から 9 時まで出演

この自治体職員協力交流事業では、日本の文化、地方自治体の仕組み、そして日本の住民の日常生活や豊橋市に住んでいるフィリピン人の状況について知ることにより、多文化共生において多くのことを学ぶことができました。

実践的な研修を通じて、私は目標と期待を達成することができました。また、今回の研修により、本事業の対象者である豊橋に住むフィリピン人市民に多くのサポートを提供することができたと思います。

TFA の仲間とラジオ番組収録の様子

３　帰国後の展望

クレア及び豊橋市多文化共生・国際課での研修は私にとって大変有意義な経験となりました。本研修で習得した知識やノウハウを、今後フィリピンの私の職場の同僚と共有し、地元の行政に活用することができると確信しています。公務員として故郷でも、豊橋市役所のような規則正しい労働倫理を築き、様々な市役所のサービスを効率的で効果的に提供できるようにしたいと思います。

最後に、豊橋市を始め、お世話になりました皆様へ感謝の言葉を送ります。豊橋市で発表した最終レポートから引用しましたので、読んでいただけたら幸いです。

「感謝の言葉」

大変お世話になった日本政府、市役所をはじめとする豊橋市の皆さん、CLAIR、そして JIAM のスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

市役所の皆さんは、私たちの同胞である「カバヤン」が豊橋でより快適で実りある生活を送れるようサポートしていただき、誠にありがとうございました。

豊橋市長とブラジル人研修員とともに

そして何よりも、この研修プログラムを通して豊橋という美しい街で暮らすことができたことを光栄に思っています。言葉だけではこの感謝の気持ちを伝えきれないほどで、お別れは涙が止まりませんでしたが、これは終わりではなく、新しい友好関係の始まりであると信じています。

最後に、この研修で得た知識と経験を市民のために、生涯大切にしていきたいと思います。

日本、豊橋市の皆様、様々な機会、友情、そして思い出を下さりありがとうございました。

「外国人市民向け行政サービスの充実に向けて」

自 治 体 名　愛知県豊橋市
研 修 員 名　ディンド・アブエグ
出　身　国　フィリピン共和国
研 修 分 野　多文化共生
研 修 期 間　６ヶ月
主な研修先　豊橋市市民協創部多文化共生・国際課

１　背景・目的

豊橋市には、11 月 30 日現在 72 カ国 15,672 人の外国人市民が在住している。その中で 6,825 人と最も人口が多いのがブラジル人市民であるが、近年急速に増加しているのが、フィリピン人市民である。本市には現在 3,233 人のフィリピン人市民が在住しており、平成 24 年の同月と比較すると、ここ 5 年で 1,000 人以上人口が増加している。

これまで豊橋市では、ブラジル人市民向けの行政サービスの強化を重点的に行ってきたため、こうしたフィリピン人市民に対応したサービスが十分ではなかった。こうした現状を打破するため、昨年度初めてフィリピン共和国より１名行政職員を自治体協力交流研修員として６カ月受入れ、研修員にフィリピン人市民が日頃抱える問題や彼らが必要とする行政サービスを明らかにしてもらった。

そして今年度は、昨年度、前研修員が洗い出した問題点を解決するため、フィリピン共和国ピリリア市より研修員を１名、同分野で受け入れることとした。

２　事業実施について

（１）研修内容

まず初めは、豊橋市役所で任用しているタガログ語の通訳とともに、市役所を訪問するフィリピン人市民の通訳として、市役所内の様々な課へ行き、本市に住むフィリピン人が日頃どのような問題を抱えているか、また彼らに対して市がどのようなサービスを提供しているかを学んでもらった。

豊橋フィリピン人協会の会合に参加する研修員

また、昨年度受け入れた研修員の最終報告書によると、多くのフィリピン人市民が、「タガログ語通訳の配置といった市役所におけるフィリピン人向けのサービスについて知らないため、市役所に相談に行かない。」と答えていることがわかった。

この問題に対して、市役所におけるタガログ語のサービスや市の制度やイベントについてフィリピン人市民への周知を図るため、タガログ語サービスについてのチラシや市の制度やイベントについて紹介記事を掲載したタガログ語のニュースレターを月に１回作成し、フィリピン人集住地区やフィリピン人レストランに配布した。

さらに、市内で活動する自助組織、豊橋フィリピン人協会の会合やフィリピン人市民が多く集まるカトリック教会の日曜礼拝に参加し、フィリピン人市民とコミュニケーションを図ったり、市の制度やイベントの周知を行った。

その他、昨年度に引き続き、行政文書のタガログ語翻訳を進めてもらうとともに、来庁者が一目で母国語の文書がどこにあるかわかるよう、サインボードを国旗のイラストとともにつくり、多文化共生・国際課のカウンターに設置した。

３　成果・課題

豊橋での研修は約５カ月という限られた期間ではあったが、研修員は、昨年度前研修員が洗い出した問題を解決するため、積極的に市内在住のフィリピン人市民とコミュニケーションをとり、市役所のサービスや市の制度についての周知を図ってくれた。また、市役所を訪れるフィリピン人市民の相談を親身になって聞き、彼らが市役所に来やすいようタガログ語のサービスについて紹介をしてくれた。

しかし、やはり日本語の壁はとても高かったようで、研修のほとんどで英語の通訳を必要していた。今年度は JIAM での通常の日本語研修に加え、フォローアップ研修も受講してもらったが、挨拶以外を日本語で行うことは難しかったようである。今後は本市での専門研修中においても、豊橋市国際交流協会の日本語教室に定期的に通う等、更なる言語の支援について検討が必要であると考えている。

地域の祭りの準備を手伝う研修員

専門研修以外においても、研修員は、地元の祭りや国際交流行事に積極的に参加をし、フィリピン人だけでなく、国籍を問わず色々な人とコミュニケーションをとり、仲良くなった。日本の文化に対して興味を持ち、そして自分の得た知識をタガログ語のニュースレターに載せることで、フィリピン人の視点から見た豊橋市の伝統や文化、行政制度を丁寧に紹介してくれた。

今回研修員が作成を始めたタガログ語のニュースレターの発行やタガログ語サービスの周知を、研修員が構築してくれたフィリピン人市民とのつながりを基に、今後も継続していきたいと考えている。そして、今回の研修で学んだことが、少しでも研修員の出身自治体の今後の施策の参考になればと考えている。

「美しい鳥取」

氏　　名	李　鑫
出　身　国	中華人民共和国吉林省琿春市
受入自治体	鳥取県
研　修　先	鳥取県観光交流局交流推進課

1　本事業に応募した動機

私は吉林省琿春市外事服務センターに勤めており、職場では主に国際交流推進業務を担当しています。琿春は 2012 年 4 月に「中国図門江地域（琿春）国際協力モデル区」に認定されてから、国際交流と海外プロジェクトの実施に一層力を入れるようになりました。琿春は鳥取県境港市と姉妹都市を締結しているほか、新潟県の上越市とも交流しています。琿春は環日本海経済圏の重要な位置にあり、積極的に環日本海地域と交流を行い、経済を発展させ、物流を増進し、交通が便利な先進都市に作り上げようとしています。

私が現在研修を行っている鳥取県は、吉林省と 1994 年に友好交流覚書を交わして以来、経済、文化、青少年などの分野で様々な交流を行ってきました。20 年以上にわたる友好交流の実績を踏まえ、2017 年 11 月に、両省県はついに友好県省提携を結ぶことになりました。鳥取に来てから、担当者をはじめ、県庁の皆様、鳥取県国際交流財団の皆様、そして、鳥取市の皆様に大変お世話になり、感謝という気持ちだけでは、私の気持ちを表すことができません。皆様のおかげで、10 か月の研修生活は楽しく、面白く、そして充実して過ごすことができ、私の人生の中で非常に重要な一部になったと認識しております。本当にありがとうございました。

2　研修の概要

（1）東京研修

5 月 11 日、わくわくしながら中国北京から出発して成田空港に到着しました。各地から来た研修員は 28 人で、派遣先に行く前に東京で三日間研修を行いました。ここではじめて鳥取県の担当者とお会いでき、鳥取県のことや研修内容などをたくさん教えていただき、鳥取に行くことをすごく楽しみにしていました。

鳥取物産フェア in 東京

東京研修が終わった後、我々は滋賀県大津市 JIAM 全国研修所に移動し、JIAM で 4 週間の日本語研修をさせてもらいました。初めての来日で、不安や、不明なことがたくさんありましたが、この一か月間で、友達がたくさんできました。ま

た、茶道体験、近江商人博物館の見学、ホームステイ体験、神戸人と防災未来センター、神戸港参観など充実な研修で、大変良かったと思います。

（２）鳥取県での研修

6 月 22 日、一緒に研修に参加したメンバーと別れ、7 月から鳥取での研修生活がはじまりました。鳥取県のご配慮で、研修をしっかり行いながら、7 月から 12 月までの間に週 2 回、国際交流財団で日本語の勉強も続けさせてもらい、研修はそれぞれの部署で行いました。

（３）交流推進課での研修

交流推進課で二か月間研修しました。台湾の中学生が鳥取県日南町の日南中学校の生徒との学校交流に随行しました。また、台湾と香港の大学生が行ったインターシップにも随行しました。学生さんと一緒に水木しげる記念館、青山剛昌記念館（名探偵コナンの作者）へ行き、鳥取県出身の漫画家のこと、漫画の作成などを知ることができ、鳥取県が漫画の王国と名付けられた理由がよく分かりました。インターンシップの研修終了報告会に参加したときに、鳥取県で体験した楽しかったことや、勉強になったことを含んだ素晴らしい発表を聞いて、皆さんの日本語が上手になったことにびっくりし、精神的にも大きく成長したことも実感しました。このような交流は若者に異文化を理解させ、将来日中友好のために頑張ってくれる人材を育てる大事な事業だと思います。

去年の 11 月 26 日に鳥取県と吉林省は友好県省提携を結んだことをきっかけに、今年 1 月 14 日に吉林省各分野の責任者が鳥取を訪問し、友好事業を進めるために分野ごとの交流内容について協議を行いました。私は代表団の随行をし、県内視察や、交流協議などに参加させていただきました。今後、鳥取県と吉林省の間では今までの交流分野以外の福祉、食品加工、電気自動車など新しい分野での交流が期待できると思います。

（４）通商物流課での研修

通商物流課でいろいろな企業訪問をさせていただくことができました。2 月の研修では、王子製紙や、大山乳業、サントリー奥大山工場、ヤマト流通センターなど県内で有名な企業を訪問し、各企業の取り組みや企業方針などの理解を深めることができました。研修期間中、鳥取県内の企業だけではなく、通商物流課のおかげで、世界一流企業や鳥取県の県外事務所なども訪問させていただきました。今年の 2 月 22 日に名古屋にあるトヨタ自動車工場、キリンビールなどよく耳にしている企業も訪問できて、すごくラッキーだと思いました。訪問の結果、当たり前のことかもしれませんが、その真剣さ、誠実さこそが力の源であり、トヨタの品質を支えているのだと実感しました。

境港市の訪問も手配していただきました。私にとって境港はとても親しみがある街です。毎年数多くの大型クルーズ船が寄港し、多くの観光客を運んでいます。境港は漁港ではなく、東アジアのゲートウェイとして、環日本海地域の交流を活発にしていることを大変嬉しく思います。そして DBS クルー

ズは環日本海の物流、人と人の交流に大いに活用されていることもよく理解できました。このクルーズ船を利用して、もの、人を日本から、韓国東海、ロシアのウラジオストク、延長できればザルビノに寄港して、中国の琿春に運ぶことができる素晴らしいルートになります。今後ぜひこのルートを大いに活用し、このエリアの経済、文化などの交流に活躍していただきたいと思います。

（５）市場開拓局での研修

市場開拓局の販路拡大・輸出推進課と食のみやこ推進課でそれぞれ研修を行い、合計二か月間の研修をさせてもらいました。この職場では、職員は鳥取県物産の販路を拡大するため、様々なイベントを行い、県内及び全国あちこちで一生懸命 PR することが印象的でした。米子市で鳥取和牛料理対決会、料理王国とイタリア料理展 in 東京、ポケモン GO in 鳥取砂丘、砂丘の展示会など多くのイベントにスタッフとして応援に行かせていただきました。県職員と一緒になって、自信を持って鳥取県の物産を一生懸命宣伝してきました。

（６）産業振興課での研修

産業振興課で 1 か月間研修を行いました。ここでの主な研修は鳥取大学の IOT ハッカソンと起業女子ミーティングです。ハッカソンは大学生が勉強した知識を生かし、就職に役立てるイベントです。日本の大学生のチームワーク精神が強いことも印象的でした。

また、鳥取県産業技術センターに設置された鳥取市「電子・有機素材研究所」は、電気・電子、有機材料、発酵、産業デザインに関する分野の企業支援を行っています。産業技術に関する試験研究とその成果は、鳥取県の産業活力を強化しています。キチン・キトサン、智頭の木材（杉）で作った圧密印鑑、介護用ショッピングカートなど、様々な分野で成果がありました。現在、酒類製造試験室で鮮やかな日本酒が開発されていることを聞いておりますが、とても楽しみにしています。鳥取県産業技術センターは企業ニーズにマッチして地域のものを最大限に活用し、技術力で多くの方々に喜んでもらえる開発理念は素晴らしいと思います。

（７）鳥取市役所での研修

鳥取市役所では一か月の研修生活を過ごしました。期間は短いですが、とても充実した研修内容でした。鳥取の先進的な植物栽培技術、豆乳工場の見学、ポリテクセンターの人材育成、シルバー人材活用、市政の事業見学、日本文化の体験など、様々な面で研修させていただきました。県の研修内容と重なることもなく、より鳥取の産業や、鳥取市の取り組みなどを理解することができ、大変有意義な研修でした。

鳥取は自然が豊富で、風光明媚なところです。山陰海岸ジオパークはユネスコに認定され、世界地質公園のリストに入っています。鳥取砂丘は長い歳月をかけて、大自然に作られた傑作です。浦富海岸は沖縄に負けないくらい

海の透明度が高く、25 メートルの深さでも見ることができます。いつ行っても四季折々の風景が見られ、心が打たれるばかりの景色です。このような素晴らしい地域は残念ながら、知名度が低いため、まだ多くの人には知られていません。これから海外の観光客を呼び込むために、県も市も観光誘致を行っています。私も微力でありながら、自分が生活した鳥取県に自信を持って、周りの人に鳥取の良さをしっかり伝えていきたいと思います。

（８）交流活動

しゃんしゃん祭りの参加：

年一回開催される「鳥取しゃんしゃん祭り」は盛大なイベントです。4 千人を超える踊り子が一斉に踊る華麗な「鳥取しゃんしゃん祭」は、第 50 回記念大会（平成 26 年）に『最大の傘踊り』としてギネス世界記録に認定され、今や全国にも広く知られる祭りとなっています。私は県庁連に加えてもらい、一か月ほど練習した後、街の中で多くの方々と一緒に踊らせてもらいました。しゃんしゃん祭りは鳥取の夏に必見なイベントであり、そのほか赤碕港波止の祭り、米子市のがいな祭り、大山大献灯も鳥取の夏を彩っています。日本は伝統祭りを大事にし、文化の財産として、地域の人に受け継ぎ伝承していくことが素晴らしいと思います。

小学校訪問：

国際交流の一環として、日本文化を感じるだけではなく、自分の国の文化を伝えることが大切だと思います。美保小学校異文化講座に誘われ、私は五年生の子供たちに、琿春市の小学校の様子を紹介しました。違う国はどんな教育しているか、同じ五年生でどんな勉強、遊びをしているか言葉だけではなく、一緒にゲームしたり、写真を見たりして、中国の文化や教育などについて日本の子供たちに体験してもらいました。現在の中国の学校状況を理解してもらい、大変良かったと思っています。

鳥取市国際交流プラザで日本文化の体験：

鳥取市国際交流プラザで着物と茶道を体験しました。お辞儀の仕方や礼儀作法について、茶道に触れながら〝おもてなしの心〟を学びました、お茶を一杯味わうことで友達を作ることができます。日中茶文化交流に長い歴史がありますが、これから鳥取県と吉林省は茶道交流ができれば嬉しいです。

（９）国際交流財団で研修

国際交流財団は鳥取県交流活動の窓口として、広く県民へ国際交流に関する情報提供を行うとともに、県内在住の外国人の生活相談や外国人と県民との交流の機会を提供します。教育、行政、福祉、保健、医療機関等で利用できる専門通訳ボランティアも派遣しますし、いろいろなイベントを開催することによって、鳥取県のグローバル化を進め、外国の方でも安心して鳥取で生活してもらっています。小さな鳥取県ですが、大きな国際交流を取り込んでいて、鳥取県民の情熱をどんどん発信しています。私がこれまで無事に研

修生活を送ることができたのは鳥取県国際交流財団のおかげだと思います。日本語の研修、日本文化の理解、生活と仕事のサポートなどすべての面で私を支えてくださって、鳥取の生活、研修、仕事を楽しんできました。

3　帰国後の展望

この十か月間、鳥取県庁、市役所、鳥取県国際交流財団、クレアの皆様に大変お世話になりました。今回の研修は両地域にとって、ただの人的交流ではなく、両地域の振興繁栄のために、お互いのことを理解し、将来両地域のために仕事ができる人を育てる上で大きな意義があるのではないかと思います。私にとっても今回の研修は人生の大きな財産となりました。鳥取県の国際交流は環日本海交流に重点を置き、取り組んでいる交流であり、担当部署は交流推進課です。国際交流は人と人の交流であるため、受け入れまでの事前準備、資料作成、随行中の連絡体制など、作業がきめ細かく決められることは、国際交流事業がうまく実施できた重要なカギだと思います。このチームワークのすごさに感心いたしました。通商物流関係につきましては、物流がうまくできるルートを打開すると同時に、積極的に吉林省の北東アジア博覧会の出展や、企業同士のマッチング事業などを通じて、鳥取の産業を PR しただけではなく、確実に事業ができるようにサポートしています。これらの研修で勉強した知識、得た経験を鳥取県、吉林省の交流に生かし、成果がある交流にしていこうと決心いたしました。これから自分の国に帰って、お世話になった方々と常に連絡を保ち、両県交流の架け橋となっていきたいと思います。10 か月過ごした美しい鳥取は、私の第二の故郷であり、永遠に忘れられないところです。いつかまたこの地に戻り、大好きな皆様と再会したいと思っています。

「平成 29 年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修」

自 治 体 名　鳥取県
研 修 員 名　李鑫（LI XIN）
出　身　国　中華人民共和国
研 修 分 野　商工行政、国際行政
研 修 期 間　10 か月
主な研修先　鳥取県観光交流局、鳥取県商工労働部、鳥取県市場開拓局、鳥取市、境港市

1　背景・目的

鳥取県の国際施策は「国内外の多様なチャンネル・分野での交流を通じた地域活性化の推進」であり、本事業を通じて、研修員に本県が持つノウハウを習得させるとともに、派遣元自治体と人的交流を深めることで、本県の国際交流施策への協力を得ることを期待している。

2　研修の概要

研修期間（全体）	平成 29 年 5 月 21 日～平成 30 年 3 月 16 日	
研修期間（詳細）及び受入先	期　間	受　入　先　等
	平成 29 年 5 月 21 日	来日
	5 月 22 日～23 日	東京でのオリエンテーション
	5 月 25 日～6 月 22 日	滋賀県 JIAM（全国市町村国際文化研修所）での日本語研修
	6 月 22 日～30 日	来県、鳥取県国際交流財団での日本語研修等
	6 月 23 日	知事表敬
	7 月 3 日～8 月 31 日	鳥取県交流推進課
	8 月 14 日	しゃんしゃん祭りに参加（県庁連）
	9 月 1 日	境港市通商観光課
	9 月 4 日～29 日	鳥取県通商物流課
	10 月 2 日～12 月 1 日	鳥取県市場開拓局
	12 月 4 日～28 日	鳥取県産業振興課
	平成 30 年 1 月 5 日～31 日	鳥取市文化交流課、同経済雇用戦略課、同企業立地支援課、同観光戦略課、同鳥取砂丘ジオパーク推進課
	2 月 1 日～28 日	鳥取県通商物流課
	3 月 1 日～15 日	鳥取県交流推進課
	3 月 5 日	知事表敬
	3 月 7 日	研修報告会兼研修修了式、送別会
	3 月 16 日	帰国

3　研修実施にあたって工夫、苦労したこと

（１）生活面

李研修員は過去に外国に行った経験が一度も無いため、生活面・精神面を特に気を付けた。李研修員とは普段から研修や休日の状況、家族・友達のこと等の状況を確認し、LINE での連絡も行っていた。李研修員以外からの状況確認として、生活面のお世話をしていただいている鳥取県国際交流財団の担当者と頻繁に連絡を取り、問題があれば随時対処していただいた。

最初の研修を鳥取県交流推進課で実施し、課内全体での歓迎会の他に、東アジア担当内で休日にランチを食べに行ったり、中国国際交流員の自宅で料理パーティー等を企画した。また、鳥吉会（吉林省に派遣経験のある県職員で構成）で交流会を何度も開催し、精神面での補助も行っていた。

（２）研修面

研修関係機関には、李研修員が研修期間中できるだけ多くの経験を積めるよう、配慮いただいた。李研修員には、研修以外にも「鳥取しゃんしゃん祭り」の参加、地元小学生へ中国文化の講習等、日本文化、地域住民と触れ合う機会に積極的に参加いただいた。本人が日本語の学習に熱心であり、鳥取県国際交流財団で行っていた日本語研修についても、日本語検定 1 級試験を受ける 12 月まで行い、李研修員の要望に沿うよう対処した。

鳥取県境港市での研修

（３）他の研修員との平等性

鳥取県は、平成 29 年度の自治体職員協力交流研修員として中国及びジャマイカから 1 名ずつ受け入れたため、両者の扱いに不平等が出ないよう気を付けた。具体的には、バス通勤、帰国時の荷物郵送費用補助、帰国時における機内預け荷物（スーツケース）の個数平等化等、今年度新たに実施した補助もある。

3　成果・課題

鳥取県は平成 11 年度から自治体職員協力交流研修員を受入れており、吉林省からは最多の 18 名に上る。研修員は帰国後も本県と吉林省との交流を継続・深化させる上で欠かせない人材となっている。昨年 11 月に鳥取県と吉林省は友好県省提携の協定を締結し、更なる交流の拡大が期待されるが、長年このような人的交流を実施してきたことも協定締結が実現した一つの要素だと考える。

今後も環日本海地域の友好交流地域である中国吉林省と幅広い分野で交流を促進し、交通インフラ、物流ネットワークの構築、国際チャーター便の活性化等による往来の容易化、両地域の経済発展の成果の共有、国際感覚を育み両地域が世界に開かれた地域となることを目指し、国際交流を積極的に推進していく。

Final Report for Local Government Officials Training Program 2017

(Name) MS. HAE MENN CHAN AYE
(Country) MYANMAR
(Host Institution) FUKUOKA CITY
(Training Facility) Fukuoka City Waterworks Bureau

1 Reasons for applying for this program

Myanmar, one of the developing countries, is going to improve in various sectors. Yangon City is the center of economy, business, and communication. And thus, Yangon City Development Committee has responsibility to improve in each sector including water supply, communication, building construction, electricity and other facilities for citizens.

Engineering department (water & sanitation) under Yangon city development committee is supplying domestic water to citizen daily as of main responsibility. At the same time, we are facing many problems and challenges on water supply system. The main challenges are high leakage in pipelines, poor water quality, and intermittent water supply period in currently. Therefore, we would like to study the water supply technologies that can support to improve our current condition and solve the challenges in systematic way.

2 Summary of Training

I have started to join the LGOTP in Tokyo on 22nd May, 2017. The participants moved to Japan Intercultural Academy of Municipalities (JIAM) in Shiga prefecture on 24th May, 2017. We have studied about Japanese language and cultures about one month over there.

On 22nd June, 2017, we started to join our specific program at Fukuoka city waterworks bureau. During 5 months, we have learned water supply technologies and management of water utility. In details, we studied water supply facilities management, water treatment technologies, water sources conservation as well as public relation. We have also joined two of JICA training programs for Non-revenue water management and sewerage system with other participants from different countries.

As of the gained knowledge from that program, I could understand the systematic management and developed techniques to supply safe and potable drinking water to customer to be satisfied. Especially, from my professional point of view, as of site engineer, I could get the knowledge such as importance of safety gear in working environment and, how we should manage to improve our current condition of water supply system.

3 Plans upon returning to my home country

After completing this training program, I would try to apply my gained knowledge and know-hows in the development of our water supply system. And also, I will definitely share what I learned to my colleagues in my organization. At first, I will submit my action plan to my head of department and other officers. After getting approval, I would start to implement my action plan even in small scale in my section as my best. I will continue to work my current position and I will try to cooperate with other activities with regard to this training program.

Final Report for Local Government Officials Training Program 2017

Name	MS. MAY ZIN OO
Country	MYANMAR
Host Institution	FUKUOKA CITY
Training Facility	Fukuoka City Waterworks Bureau

1 Reasons for applying for this program

Myanmar, one of the developing countries, is going to improve in various sectors. Yangon City is the center of economy, business, and communication. And thus, Yangon City Development Committee has responsibility to improve in each sector including water supply, communication, building construction, electricity and other facilities for citizens.

Engineering department (water & sanitation) under Yangon city development committee is supplying domestic water to citizen daily as of main responsibility. At the same time, we are facing many problems and challenges on water supply system. The main challenges are high leakage in pipelines, poor water quality, and intermittent water supply period in currently. Therefore, we would like to study the water supply technologies that can support to improve our current condition and solve the challenges in systematic way.

2 Summary of Training

I have started to join the LGOTP in Tokyo on 22nd May, 2017. The participants moved to Japan Intercultural Academy of Municipalities (JIAM) in Shiga prefecture on 24th May, 2017. We have studied about Japanese language and cultures about one month over there.

On 22nd June, 2017, we started to join our specific program at Fukuoka city waterworks bureau. During 5 months, we have learned water supply technologies and management of water utility. In details, we studied water supply

facilities management, water quality management and analysis methods, water treatment technologies, water sources conservation as well as public relation. We have also joined two of JICA training programs for Non-revenue water management and sewerage system with other participants from different countries.

As of the gained knowledge from that program, I could understand the systematic management and developed techniques to supply safe and potable drinking water to customer to be satisfied. Especially, from my professional point of view, as of chemical engineer, I could get the knowledge such as importance of water quality analysis advance methods, water quality monitoring and disinfection facilities for supply safe and drinkable water, how we should manage to improve our current condition of water supply system.

3 Plans upon returning to my home country

After completing this training program, I would try to apply my gained knowledge and know-hows in the development of our water supply system. And also, I will definitely share what I learned to my colleagues in my organization. At first, I will submit my action plan to my head of department and other officers. After getting approval, I would start to implement my action plan even in small scale in my section as my best. I will continue to work my current position and I will try to cooperate with other activities with regard to this training program.

Final Report for Local Government Officials Training Program 2017

Name	Mr. Ye Thiha Aung
Country	MYANMAR
Host Institution	FUKUOKA CITY
Training Facility	Fukuoka City Environmental Bureau

1 Reasons for applying for this program

Myanmar, one of the developing countries, is going to improve in various sectors. Yangon City is the center of economy, business, and communication. And thus, Yangon City Development Committee has responsibility to improve in each sector including water supply, communication, building construction, electricity, pollution control and other facilities for citizens.

Pollution Control and Cleansing department is monitoring air quality, water quality, soil quality and sweeping, collecting and transporting the waste from roads and streets in the townships within the boundary area of Yangon City Development Committee. At the same time, we are facing many problems and challenges on solid waste and environmental management system. The main challenges are lack of law enforcement, illegal dumping, effective waste collection and transportation system, 3R and recycling system, detail plan for SWM, implementation plan for SWM, master plan for SWM and Environmental Management.

Therefore, I would like to study solid waste and environmental management that can support to improve our current condition and solve the challenges in systematic way.

2 Summary of Training

I have started to join the LGOTP in Tokyo on 22nd May, 2017. The participants moved to Japan Intercultural Academy of Municipalities (JIAM) in Shiga prefecture on 24th May, 2017. I have studied about Japanese language and cultures about one month over there.

On 22nd June, 2017, I started to join our specific program at Fukuoka city environmental bureau. During 5 months, I have learned solid waste and environmental management of Fukuoka City. In details, I studied solid waste management, waste water treatment technologies, public and school student

<Garbage Collection>

awareness campaigns for 3R, waste management and environmental management, waste incineration plant technologies, sanitary landfill technologies, recycling technologies, and waste disposal system.
As of the gained knowledge from that program, I could understand the systematic management and developed techniques to monitor air, water and soil quality, to strong the law and regulations, to promote solid waste awareness campaigns and environmental awareness campaigns, to implement engineering secure sanitary landfill, waste incineration plant, waste water treatment plant and to develop 3R system. Especially, from my professional point of view, as of environmental engineer, I could get the knowledge such as importance of safety gear in working environment and, how we should manage to improve our current condition of solid waste and environmental management system.

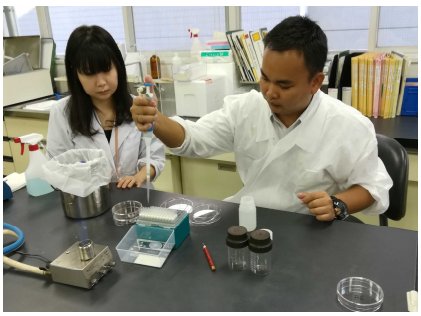
<Presentation about the situation in my country>

<Awareness campaign>

<Measurement>

3 Plans upon returning to my home country

After completing this training program, I would try to apply my gained knowledge and know-hows in the development of our Yangon City's Solid Waste and Environmental Management system. I will implement Fukuoka Sanitary Landfill in Yangon. And also, I will definitely share what I learned to my colleagues in my organization. At first, I will submit my action plan to my head of department and other officers. After getting approval, I would start to implement my action plan even in small scale in my section as my best. I will continue to work my current position and I will try to cooperate with other activities with regard to this training program.



<Other activities>

「平成 29 年度自治体職員協力交流事業　報告書(福岡市)」

自 治 体 名	福岡県福岡市	
研 修 員 名	①HAE MENN CHAN AYE ②MAY ZIN OO	③YE THIHA AUNG
出　身　国	①②③ミャンマー	
研 修 分 野	①②水道	③環境
研 修 期 間	①②③６か月	
主な研修先	①②水道局	③環境局

1　背景・目的

福岡市は，これまで培ってきた「住み良いまちづくり」の技術やノウハウを活かした国際貢献・国際協力を推進しており，特にミャンマー・ヤンゴン市については国際貢献を通じた行政間交流を契機に平成 28 年 12 月，日本・ミャンマー間で初となる姉妹都市となっている。

本事業はヤンゴン市における都市問題の解決と，両市の友好関係をさらに深めることを目的に，ヤンゴン市職員の研修を実施するものであり，平成 26 年度から継続して取り組んでいる。今年度は従来の水道分野に加え，ごみ処理等の環境分野でも新たに受け入れを実施した。

2　研修の概要

エンジニアである各研修員の専門分野に重点を置きながら水道行政全般，及び環境行政全般について研修を実施した。

また研修開始時には自国の状況・課題を発表するカントリーレポート発表会を，研修終了時には学んだことを自国でどのように具体に役立てるかを発表するアクションプラン発表会を，水道局・環境局で開催した。

その他，各分野における市民啓発や市民体験型のイベント，姉妹都市ヤンゴンを紹介する観光イベントなどへの参加を通し，市民との交流を図った。

研修風景（写真左から Hae Menn Chan Aye さん(右)・May Zin Oo さん，Ye Thiha Aung さん(右から 2 番目)

3　研修実施にあたって工夫、苦労したこと

研修，研修員とのコミュニケーションは英語で実施した。予算面の制約および市職員の国際感覚醸成・語学力向上のため，プロの通訳・翻訳は要所での利用とし可能な限り市職員が実施した。また，簡単なミャンマー語を職員

用にまとめることで，職員と研修員との積極的な交流が図れる環境を整えた。
また，受入体制として横断的な活動を可能にし，効率的な研修実現のため受入局の各関係所属から対応の主となるメンバーを選出し研修を遂行した。
研修においては，講義だけでなく，現場視察や実習を取り入れることにより，研修員の理解がより深まるよう努めた。また定期的に研修内容の不明な点やニーズを研修員に確認し，理解度や要望に応じて研修メニューをアレンジした。さらに，研修分野が多岐にわたるものであったため，なるべく分野毎に日程を固めるなど，体系的な理解が得られるように努めた。加えてJICA研修に同行させるなど，他の研修プログラムを有効活用し，他国の研修員と交流・連携し，研修効果を高めることができた。
生活面においては通勤や買い物が便利な地域での居住など，生活環境にも配慮するとともに，生活に慣れるように市職員が研修員をサポートした。研修員は休日などを活用し，福岡市内外の観光や職員が自発的に企画したイベントに参加したことで，日本の文化や風習の体験と，職員との交流を深めた。
また，両市の姉妹都市締結を記念し小学校給食にミャンマー料理が提供された際，研修員が小学校を訪問し，生徒に対してミャンマーの食文化を中心に様々な説明を行い，国際交流に繋がった。

市民啓発イベント(打ち水)参加

プライベートの交流(駅伝大会)

小学校給食で自国を紹介

4　成果・課題

本研修を通じ，研修員は福岡市が培ってきた技術・ノウハウを学ぶことができ，ヤンゴン市でのそれぞれの所属で実行することとなる「アクションプラン」を完成させた。帰国後には福岡市によるヤンゴン市での技術セミナーを開催し，その中で研修員によるアクションプランの発表を行った。ヤンゴン市職員間で研修成果が共有されたことで，プランに基づく改善が期待される。また，福岡市職員がヤンゴンに渡航し活動を行う際に研修員が両市の調整役を積極的に担うなど，両市の信頼・協力関係の強化を実感している。
一方で福岡市とヤンゴン市では都市の特色等に相違点があるため，ヤンゴン市の環境改善に向けては，様々な改善策を比較検討していく必要もある。
今後は，アクションプランのフォローアップ等を行いながら，本市からヤンゴン市へ派遣中の職員との連携等により，さらなる国際貢献・国際協力に取り組む。そして，国際貢献・国際協力を通じて構築された信頼関係を基に，官民連携による海外事業案件の受注や地場企業等のビジネス機会の創出を図り，ヤンゴン市の都市問題解決と地域経済の活性化に繋げていきたい。

「　日本研修生活の回顧　」

氏　　名	石　暁琳
出　身　国	中華人民共和国
受入自治体	佐賀県佐賀市
研　修　先	佐賀市国際交流室

1　本事業に応募した動機

私の勤務する連雲港市はこの数年、規制緩和と制度改革を背景に発展戦略を加速的に推進していましたが、更に経済発展のために実務的な協力を大いに推進することは私にとって重大な課題です。日本で修得した技術・ノウハウを将来の連雲港市の発展に活かしていきたいです。また、佐賀市と友好都市を締結して以来、幅広い分野での交流と協力を推進していました。日中国際交流のかけ橋となり、両市の連携に貢献したいと思い応募しました。

2　研修の概要

（1）東京・JIAM 研修

日本語の向上だけでなく、江戸東京博物館、東京タワー、神戸人と防災未来センター、神戸港、近江日野商人館等の見学のほか、茶道、ホームビジットも体験し、ごみの分類や自転車の規則なども学び、日本で生活するにあたり、基本的な理解ができました。

（2）地方自治体研修

佐賀市国際交流室にいる半年間、佐賀市役所人事課・資産税課・工業振興課・消費生活センター・総務法制課・商業振興課・福祉総務課・水産振興課・農業振興課・緑化推進課・健康づくり課など多くの部門の研修を受けて、多方面で視野を広げ、知識を増やしました。また、友好都市や佐賀市民との交流事業にも参加し、友好都市の間の理解と友情を促進しただけでなく、広く県内にも視察し、佐賀の自然と文化の魅力も一層分かりました。

①行政研修

私の研修分野は一般行政で、佐賀市の行政経営、産業振興、環境保護、市民のくらし、健康福祉、消防防災などの面において様々な研修を受けました。特に消費者行政と産業振興策に興味深いので、いろいろ勉強になりました。

消費生活センターで日本の消費者行政の体制、地方消費者行政の強化に向けた支援方法、佐賀市の取り組みと消費生活センター業務、様々な消費者意識啓発などについて研修しました。子供の頃から良い消費習慣を育てて消費者問題を減らすために、夏休みに主に子供向けのおもしろ雑学講座を行うこと、及び悪質業者を抑止するために弁護士相談を設置することが一番深く印象に残りました。また、消費生活センターが行う様々な講座にも参加し、多方面で勉強しました。

そして、工業、商業、水産業、農業などの面において研修を受け、佐賀市の産業振興策を勉強しました。

工業振興課では企業誘致と工業振興についての研修を受け、工業団地を見学しに行きました。企業誘致室はどのように空き工場などの情報を収集し、佐賀の優遇制度を利用することによって企業を誘致するのか、産業支援相談室はどのように創業・経営革新・公的資金制度の活用などの面で企業にサポートを行うのかを理解することができました。

商業振興課が行う平成 29 年度「地場産品・製品等商談・アドバイス会」に参加しました。その会は佐賀の地場産品と製品の販路拡大及び佐賀の商業振興にとって絶好な形式だと思います。

水産振興課が行う九州佐賀国際空港での佐賀海苔 PR 事業に参加しました。その事業は九州佐賀国際空港において夏季の帰省客及び外国人観光客を対象として、佐賀海苔の PR と販路の拡大を促進するために行われました。佐賀市の水産業の概要、海苔養殖の実績、販路拡大の必要性もわかりました。

農業振興課では佐賀農業の現状や、農商工連携・農業の 6 次産業化などの地域経済を活性化する取り組み及び法に基づき様々な支援策について勉強しました。また、農園でのそば打ち体験、直売所やビニールハウスの見学などの現地研修を通して、佐賀が誇る農業への理解をすごく深めて、佐賀市の地産地消・都市と農村の交流·各種事業などの多方面で知識を学び、農業振興のための様々な効果的な取り組みや支援策も一層分かりました。

地域経済を支える要として、地域産業の再生・活性化が非常に重要だと言えます。佐賀の産業振興策からいろいろ勉強になって、大変役立つと思います。

また、人事課が行った女性職員向けのキャリアデザイン研修講座、消防防災課が主催した佐賀市総合防災訓練、佐賀市清掃工場のごみの資源化と万全な公害防止対策、高齢者施設の先進的な技術と豊かなサービス方法、日本の民生委員制度について学んだことも深く印象に残りました。

②友好都市、市民との交流事業

まずはアメリカ姉妹都市教育交流訪問団を対応した時に、佐賀市内の小学校を訪問し、各国の学校の相異点を話したりしました。一階にペットボトルの蓋がたくさん集まっているのに気づきました。蓋で車椅子に交換すると言われました。当番表や礼儀の規則もちゃんと壁に貼っています。日本の学校は子供の責任感と礼儀と思いやりの心を育てるのを重んじていると感じました。

そして、連雲港市友好経済代表団が佐賀に来たときはバルーンミュージアム、佐賀城本丸歴史館、徐福長寿館の見学をし、ケアポート晴寿という高齢者施設などの視察をしました。日中友好、平和のシンボルとしての徐福伝説を聞きながら、2200 年前からの繋ぎを身近に感じました。佐賀県徐福会の方とも友好交流を深め、徐福が始めた両市の友情を増進することもできました。

それに、ボランティアとして佐賀インターナショナルバルーンフェスタに参加し、パイロットと他のボランティアと一緒に作業をしました。様々なイベントで熱気球の楽しさを知ることと併せて、

自分の手で巨大な気球に立ち上がらせることもすばらしい体験になりました。

また、講師として国際理解講座を行い、佐賀市民に中華料理の作り方を教えて連雲港市の概況を紹介しました。準備は大変で、緊張しましたが、講座は楽しく順調に済みました公民館で通学合宿している小学生と軽スポーツをしたり、連雲港を紹介したりして、面白かったです。在住外国人と市民とのスポーツ交流会にも参加して、友好都市への理解と友情を深める機会を作ることができ、本当に嬉しかったです。

インターナショナルバルーンフェスタにボランティアとして参加

③文化視察

滞在中は広く県内にも視察しました。有田では九州陶磁文化館、源右衛門窯を見学し、佐賀が誇る有田焼への理解ができ、九州の焼き物の種類や歴史、地区別の特色、陶磁器の製作工程なども勉強しました。

また、嘉瀬川ダム、干潟公園、三重津海軍所跡、唐津城、旧高取邸、曳山展示場、バルーンミュージアムなどに行き、「日本手芸の極地」と称賛される佐賀錦の体験をし、佐賀の自然環境、歴史伝統と文化魅力への理解が増しました。

この半年間、各部門の業務や仕事のやり方などへの理解ができただけでなく、佐賀の人文魅力を感じることもできました。日本の方の礼儀正しさ、親切さ、まじめさが深く印象に残りました。

3　帰国後の展望

この半年の研修を通じて、日本の先進的なノウハウや経験を多く学んだことは、私の課題に大変役立つと思います。帰国後、必ず連雲港市の実情に応じて活かそうと思います。以下の取り組みをするつもりです。

まずは勉強した各部門の科学的な措置と先進的なノウハウを報告書にし、上級部門に提出します。そして連雲港の係りの部門の方と相談し、連雲港の現状や課題を分析し、自分の意見やアドバイスを伝え、良い対策を目指して協力します。また日本における見聞、印象や感想などを広く宣伝するため、中国のソーシャルソフトなどで紹介したいと思います。それに地域活動に積極的に参加し、企業や市民に対する講座などにおいて日本で勉強した内容を伝えていきたいと思います。

今回の研修において日本の皆様からたくさん協力をいただきました。特にクレアと佐賀市役所の皆様に大変お世話になり心から感謝しています。また、これからも佐賀市と連雲港市の架け橋として、両市の連携と日中両国の友好のために努力したいと考えております。

平成２９年度自治体職員協力交流事業について

自 治 体 名：佐賀県佐賀市
研 修 員 氏 名：石　暁琳
出　身　国：中華人民共和国
研 修 分 野：一般行政
研 修 期 間：７ヶ月
主 な 研 修 先：佐賀市国際交流室

１．　背景・目的

本市は、1998 年に「徐福」を縁にして、中国江蘇省連雲港市と友好都市締結を行った。平成１１年度から本事業により連雲港市政府より協力交流研修員を受け入れており、今年度で 16 代目である。

当該研修員を受け入れることにより、様々な行政研修を受ける中で日本の行政システム等を習得させるとともに、市民との交流事業を実施し、市民の中国に対する理解・認識を深め、更には、中国人を始めとする外国人住民の生活支援施策等への協力を通じて佐賀市の国際化を推進することを目的としている。

２．　事業実施に当たっての工夫、苦労など

研修員には、来日前に佐賀での生活に関する情報提供を行うなど、メールのやりとりし、初めての海外生活への不安を軽減するように努めた。来日後はオリエンテーション、ＪＩＡＭでの日本語研修を経て来佐し、その時点で生活するにあたっての基本的な内容は理解できていた。ただ慣れない環境ではあるので一週間に一度はミーティングを行い、研修スケジュールの説明とともに生活に対する不安、健康状態の確認を行うようにした。

日本語能力については、市役所内の部署で研修に足るものであったため、本市赴任後はスムーズに各部署での研修を行うことができた。市役所での研修については、赴任前に本事業の応募申請書から研修員の学びたい分野での研修を依頼するとともに、全庁的に研修の受入について依頼し、事前に研修時期などを調整した。ただ、どの部署も多忙であり、一定期間研修員を受入れる体制をとれるところは少なく、多くの部署が１日研修という形をとらざるを得なかった。このため、より効果的な研修とするため研修員には月毎の研修スケジュールを提示し、事前の予習を徹底するように努めた。

３．　成果・課題

専門研修は、本人が希望した分野だけではなく、本市の行政全般について見識を深めてもらうため幅広い分野で行ったほか、港湾都市としての連雲港市の課題解決のため、県外研修も行った。

本市での研修では、特に研修員の本国での業務と関連がある消費生活分野や連雲港市の発展を考える上で重要な産業振興分野について大変興味深く感じたようだ。

国が異なるので、帰国後に本市で学んだことをそのまま取り入れることは困難であると思うが、関係部署に研修で学んだことを可能な限り報告することで今後の連雲港市の発展につなげたいと積極的であった。

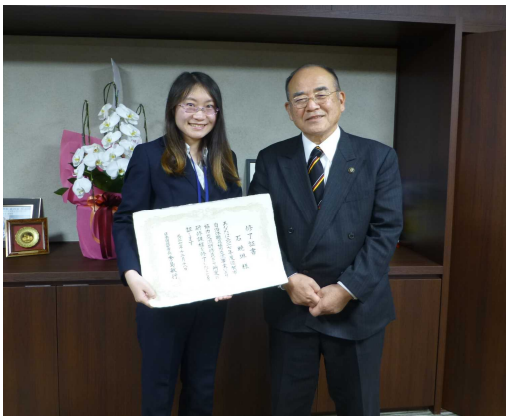
また、研修先での職員の仕事への姿勢、取り組み、進め方などについても影響を受けたとのことであり、帰国後のスキルアップにもつながるものだと期待している。

課題としては、今後更に効果的な研修をするためには、研修員が本国で携わる分野について庁内だけでなく、他の行政機関等とも連携をしながら研修計画を立て、進める必要性を感じている。

さらに、研修中は、市民との交流事業も実施した。友好都市である連雲港市を紹介する市民講座は、餃子を作る料理教室とあわせて行ったが、研修員自身、料理を教えるのは初めてということで大変プレッシャーを感じていたようだ。しかし、参加者と交流しながら楽しく餃子作りをし、その後は連雲港市について概況、特産品や観光地等を写真を多く使って紹介してくれた。参加者にも好評であり、友好都市への関心を深めてもらうことができた。

そのほか地域公民館からの要請による小学生交流事業への参加や、市国際交流協会が開催する子育てイベントでは、本国での幼児向けの歌や遊びを紹介し、多くの市民と触れ合うこともできた。

そして、連雲港市から公式訪問団が来佐した際には、視察した高齢者施設資料の翻訳や市が運営する観光施設の翻訳等本市の多言語化にも貢献してもらった。



市長から研修修了証を手渡された

また、佐賀インターナショナルバルーンフェスタにもボランティアとして奮闘したほか、休日なども市内外で開催される祭りや交流イベントにも積極的に参加したようだ。このようななかで参加者や関係者との新たなつながりが生まれ、交流の幅が広がったことも大変有意義であった。

赴任中、友好交流の架け橋として佐賀をもっと宣伝したいと研修員自身が体験したこと、訪問した所などを中国版ＳＮＳで発信していたが、帰国後も研修員が学び、感じ、体験したことを本国で多くの人と共有することができれば、友好都市として魅力を感じてくれる市民が増え、市民レベルの更なる交流につながるのではないかと考える。

協力交流研修員研修報告書

「大分県での研修をふりかえって」

氏　　名　　戴　立　君　Dai Li Jun
出　身　国　　中華人民共和国
受入自治体　　大分県
研　修　先　　企画振興部国際政策課、大分市役所、
　　（公社）ツーリズムおおいた

１　本事業に応募した動機

私の故郷は湖北省の十堰市で、有名な武当山があり、ジャッキー・チェンの映画 「カンフードリーム」のロケ地にもなりました。今私は湖北省孝感市で働いています。孝感市は中国で唯一の「孝」の字が付いている都市で、米酒と麻糖(マータン)（ごま飴）でよく知られています。今回、日本の大分県に来て、観光行政を勉強し、新鮮な知識を学び、異なる国の観光業の発展状況を知ろうと思いました。ご承知のように，日本はアジアでとても魅力的な国です。特に特色ある観光産業が成熟し、毎年多くの外国人観光客が観光に来ています。なかでも大分県は日本の有名な温泉地であり、湖北省と大分県、武漢市と大分市が友好的な都市で、私もお互いの友好交流に貢献したいと思いました。

２　研修の概要

（１）全体研修

5月19日に各国の研修員が東京に到着し、全体研修が始まりました。東京タワーや博物館などに行きました。政府関係者の講演、日本語レベルチェックがありました。その後、滋賀県の全国市町村国際文化研修所(JIAM)で6週間の日本語研修を受けました。研修内容は日本語に加え、日本の高齢社会の研究報告、日本文化講義、茶道体験、防災センター見学などでした。週末に京都などいろいろ有名な観光地にも行きました。ここで基本的な会話能力を身につけました。

（２）国際政策課での研修

着任した後に、私は大分県二日市副知事と廣瀬企画振興部長に会って、湖北省外事弁公室と孝感市孝南区外事弁からの挨拶をお伝えし、『孝感県誌』と孝感特産の芸術品をプレゼントしました。

①　講義を聞き、文化交流に参加

この期間に私は2回の講座に参加しました、外務省の儀典官による「国際儀礼研修」講座と、ＡＳＥＡＮ交流促進協会による「ＡＳＥＡＮ設立50周年の講座」です。私の日本語では理解しにくいところもありましたが、以前触れたことのないことをたくさん学び、目を開くことができました。

② 留学生のグループと日本の農場の楽しみを体験

大分県は外国からの留学生が多く、留学生とのつながりを重要視しています。徳野課長は留学生に大分県を紹介するスタディツアーに参加するよ

うに私たちを誘ってくれました。農場では、自家製のソーセージを試し、学生と一緒に肉を焼いたり、温室を訪れたりしました。日本と中国の温室はほとんど違いはありませんが、細部では，温室のスライドドアや、各プラントの独立したインキュベーターなどに学ぶ価値があると思いました。

③ テレビ取材に同行

広報広聴課の仕事で、OAB TV チームの取材に同行する機会が 2 回ありました。私は見ているだけでしたが、とても勉強になりました。私は大分埋蔵文化財センター、日田市立博物館の昆虫展、中津市の有名な青の洞門でのインタビューや撮影プロセスを見学しました。それは私にとってとても新鮮で、撮影している間、良い番組を作るため、クルーの皆さんの専門知識と献身的な努力にとても感心しました。

④ 津久見市扇子踊りに参加

8 月 19 日の夜、県庁の同僚と津久見市へ「扇子踊り」に行きました。はじめてのお祭りなので、わくわくしました。津久見扇子踊りは 450 年の歴史を持ち、最初は大友宗麟の時代の戦争で亡くなった方のために作った踊りといわれ、今では重要な郷土芸能になっています。踊りの発展とともに、京都の扇子踊りをはじめ、様々な地域の伝統踊りと融合し、ようやく今の形になりました。日本の伝統的な踊りの背景には必ず物語があると聞いたのですが、扇子踊りを踊る際、まるで先人の時代に遡るように感じられ、日本文化を体験しようとする方には最適です。

津久見の扇子踊り

扇子踊りのほか、学生の合唱団と演奏部のパフォーマンスも鑑賞しました。楽器の演奏をしながら、分列したり踊ったりし、素晴らしい演技に実に驚かされました。勉強と課外活動が両立した日本の教育に感心しました。今回の扇子踊りの体験は私にとって忘れられない大切な思い出になりました。きれいな着物を着て、素晴らしいパフォーマンスに参加し、新しい日本および大分を発見しました。これからの研修生活でまたこのようなチャンスを見つけて、日本文化への理解をどんどん深めたいと思いました。

（３）大分市役所での研修

大分市観光課での研修では、高崎山自然動物園にかわいいサルを見に行きました。また、佐賀関で、100 年前の灯台を見、鶴崎踊り大会で受付業務を担当しました。この間、有名な「別府地獄めぐり」にも行きました。私は温泉がたくさんあるこの街が好きです。多くの興味深い活動を通じて大分の観光産業の新たな理解を得ました、私だけでな多くの人が大分県・大分市の美しさを見て、また観光の発展がもたらす生活の変化を感じてほしいと思います。

① フルイングリッシュサマーキャンプに参加

大分市で働く外国人教師たちと一緒に子供たちが英語だけで生活する「オースティンビレッジ」に参加しました。外国語教師のほとんどはアメ

リカ、カナダ、オーストラリアからで、私のパートナーは、シンガポールの中国人女性の先生でした。私にとっては英語を話す方が日本語を話すよりもずっと簡単です。教師や子供たちはとても満足していましたが、教師の役割が簡単ではないことにも深く気づきました。この期間中、ゲームをしたり、話をしたり、子供と一緒に知識を学んだりすることは、私にとって非常に特別な成長体験となりました。

（４）（公社）ツーリズムおおいたでの研修

私は 9 月から大分県観光協会（ツーリズムおおいた）で研修を始めました，多くの観光体験に参加をしました。最も印象的だったのは、世界最大級の観光イベント「ツーリズム EXPO」に参加したことです。展覧会には、アジア、北アメリカ、ヨーロッパ、南アメリカなどの数十の国々が参加しています。会場は日本国内展示、海外展示エリアに分かれており、私は主に大分ブースの宣伝活動に参加しました。私はこの大規模なイベントに初めて出席することに非常に興奮しました。それぞれの国に特徴的なパフォーマンスと観光資源の紹介は非常に豊富でした。

また、大学生の観光資源の発表会に参加しました。日本の大学生が研究対象として観光地を選び、観光開発の新しい提案を PPT で説明し、スピーチとパフォーマンスを評価し最終的に審査員が様々な賞を選びました。これらの日本人学生は研究に非常に有能で、チームワークスキルは非常に強く、パフォーマンスにも独自の特徴を持っていました。私が驚いたのは、中国では大学生がそのような課外活動に参加する機会はほとんどなかったからです。これはまた、日本の観光に〝新鮮な血〟を流し込む方法です。大学生の研究を通じて、貴重な新しい観光資源のプロジェクト、良い方法を探索する。これは観光機関に新しいアイデアを提供するだけでなく、大学生の余暇時間を充実させ、参加意識も高めます。

ツーリズム EXPO

３　帰国後の展望

６ヶ月間の研修を通じて、日本の文化的魅力と観光発展の様子を理解し、多くの新知識を学ぶことができました。大分県の研修に参加させてもらえてとてもありがたく思います。帰国後、孝感市の特色ある旅行プロジェクトの発展に力を入れ、日本で学んだ経験を活かして、孝感の観光宣伝の仕事に活用したいと思います。観光客の誘致や観光ハードウェア施設の建設、潜在力のある観光地を発掘し、観光文化を強化するキャンペーンを展開したいです。大分県は日本の有名な温泉県で，孝感市はまた中国の有名な孝行の発祥の地です。私は、お互いから学ぶべき場所がなければならないし、将来的にはお互いがより良くなると信じています。

最後に、研修の際に助けてくださった指導者や同僚の皆様に感謝の意を表します。私は大分県でこのような美しい日々を過ごして、そして多くの有用な経験を学び、とても感謝しています！

事業報告書

「湖北省研修員の受入について」

自 治 体 名　　大分県
研 修 員 名　　戴　立　君　Dai Li Jun
出　身　国　　中華人民共和国
研 修 分 野　　観光
研 修 期 間　　６か月
主な研修先　　企画振興部国際政策課、大分市役所、
　　（公社）ツーリズムおおいた

１　背景・目的

大分県は、海外戦略を策定し、県産業の活性化や、グローバル人材の育成を図っている。中国との交流においては、特に湖北省との関係強化を目指しており、平成２５年度から一般財団法人自治体国際化協会のＬＧＯＴＰを活用し、中国湖北省の自治体職員の研修員を受け入れてきた。研修経験者との人的ネットワークを構築し、両省県間の貿易・観光・文化交流の架け橋としたい。

２　研修の概要

ＪＩＡＭでの６週間研修を受けた後、来県直後の８週間、国際政策課内で研修を行った。通常は大分県への理解に関することや、日本語の学習を行ったが、国際交流関係の研修会や講演会の聴講、県内視察も兼ねて広報広聴課の広報番組取材への同行、津久見扇子踊り大会への参加、留学生スタディツアーへの同行など、大分県への理解を深めてもらった。

また、大分市の協力を得て、大分市内視察、鶴崎踊り大会の業務体験、小学生のイングリッシュキャンプ等に参加した。

８月末から１０週間にわたり、（公社）ツーリズムおおいた（大分県観光協会）で、観光誘客・宣伝の研修を行った。期間中、東京でのツーリズムＥＸＰＯの大分県観光宣伝活動を行った。

帰国前に、海外で大分の情報を発信する「めじろん海外特派員」に任命した。

３　研修実施にあたって工夫、苦労したこと

指導員である職員が常について指導することはできないため、参加する行事等のないときは、執務室にて日本文化や日本語の自習となることが多かった。大分県について理解を深めるため、テーマごとに自分で調べてまとめる課題を与えた。日本語能力のステップアップのため、週２回、ＮＰＯが実施する日本語レッスンに通ってもらった。　その他、伝統行事等にも参加することで、文化理解を深めた。

観光行政を実地で学ぶため、研修期間のうち１０週間を観光協会であるツーリズム大分での実地研修とした。

国際政策課のメンバーと

４　成果・課題

成果：中国湖北省での人脈形成や相互理解の進展が期待される。

湖北省から５年間に５名の研修員を受入れ、各地域政府に人的なつながりができたことで、今後の多方面にわたる経済・文化交流の足がかりができた。

課題：研修のカリキュラムが十分に組み立てられていなかったため、自習の時間が多かった。研修員がスキルを身につけられるよう、課題学習や、実地研修、視察等をさらにカリキュラムに組む必要がある。

また、帰国後も随時連絡をとりあい、交流を継続していく体制も確立していく必要がある。